

# ココロヤマシの重み

—源氏物語語彙小考—

望月郁子

## 一 導言

源氏物語に表れるココロヤマシについての、近年の諸注を拾ってみると、

「心病む」の形容詞化。心が痛む、不満であるの意。心が傷つけられたような不快さをいう。腹立たしくじれたい。

…（小学館日本古典文学全集・完訳日本の古典）

おもしろくない。不満。心外千万な。胸のおさまらぬ。ねたましく。うらめしく。腹立たしい。心の焦れる。…（新潮日本古典集成）

といった説明が支配的である。

古典語の語義を現代語によって置き換えて示そうとすれば、こういったところにならざるをえないであろうが、筆者の見通しを先に言えば、源氏物語におけるココロヤマシは日常さらに体験される心情ではなく、現代語のへおもしろくない

い・不満だ……Vよりもずっと深く重い心の痛みであり、一旦ココロヤマシと意識されると、容易にはもとに戻れない質のものであって、自己の敗北を明確なものとして認識せざるをえない時の心情をいうのではないかと思われる。これは、必ずしも新見とはいいがたい。例えば、『岩波古語辞典』は△自分より優越していると認めた相手に対して感じる劣等意識や、敗北感をこらえている不愉快な感情を表す。Vとし、近年の諸注にも「決定的な敗北に心痛む気持ち（小学館『完訳日本の古典』絵合の注）」とある。とはいえ、ココロヤマシの重さを考えると、単に語義の問題にとどまらず、物語展開上キイワードの役割を果たす場合もありそうである。その意味で、この小論では、ココロヤマシの事例をやや詳細に検討し、ココロヤマシの使用される状況を事例から抽出し、いくらかでも源氏物語の読みを深めたい。

ココロヤマシが右の如くであるとして、その種の体験の重さは一様ではない。源氏物語の中でも、例えば若き日の源氏と頭中将との張り合いの中での勝ち負けと政権掌握決定戦でのそれとでは、当人の真剣さこそ仮に同一であるにせよ、事の重大さが違う。以下、重い事例を人物別に取り上げ、その他の諸事例は、紙幅の都合で、略述に留める。源氏物語の本文は小学館『完訳日本の古典』による。但し句読点は付さない。また表記の便宜上漢字を仮名にするばあいがある。事例の所在中の数字は頁数である。

## 二 重いココロヤマシの人物別検討

### 〔二一〕（弘徽殿女御のココロヤマシ）

△事例1 V（桐壺帝讓位）「今はましてひまなうただうどのやうにて（藤壺が桐壺に）そひおはしますを今后は心やましう思すにや内裏にのみさぶらひたまへば（葵95）」弘徽殿は桐壺に接近できない。藤壺に先を越されて、自己の敗北を確実なことと認識せざるをえない。その気持ちがココロヤマシである。以後、物語に弘徽殿と桐壺との再会は表われない。桐壺の

臨終にも「大后も参りたまはむとするを中宮のかく添ひおはするに心おかれて思しやすらふほどにおどろおどろしきさまにもおはしまさで隠れさせたまひぬ（賢木158）」である。当該のココロヤマシは、桐壺讓位直後の一時のみの敗北ではない。後々まで尾を引く取り返しのない敗北である。

「大后御悩み重くおはしますうちにもつひにこの人（源氏）を消たずなりなむことと心病み思しけれど帝（朱雀）は院（桐壺帝）の御遺言を思ひきこえたまふ（濡標103）」弘徽殿のココロヤムの事例。政界から一旦身を引いた源氏を亡きものにしまれず、源氏の政界復帰・我が子（朱雀）の讓位が決定的となり、弘徽殿の権力行使もこれまでとなった時の弘徽殿の敗北感―気の狂いそうな心的たたかい―をココロヤムという。

ココロヤム・ココロヤマシが日常茶飯事の心理状態でないことに留意したい。

ちなみに父右大臣のココロヤマシをここであげておく。

△事例2▽（源氏と朧月夜との密会を父右大臣が目撃する場面）「几帳より見入れたまへるに……あさましうめざましう心やましけれど……目もくるる心地すればこの畳紙を取りて寝殿に渡りたまひぬ（賢木197）」右大臣は衝撃のあまりシテヤラレタ怒りと同時に「目もくるる心地」になっている。これが動機で源氏は須磨に退去する。

〔二二〕（六条御息所のココロヤマシ―物の怪―）

△事例3▽「つひに御車ども立てつづけたればひとだまひの奥に押しやられてものも見えず心やましきをばさるものにてかかるやつれをそれと知られぬるがいみじうねたきこと限りなし榻などもみな押し折られてすずろなる車のどうにうちかけたればまたなう人わろく悔しうなにに来つらむと思ふにかひなし（葵100）」車争いの場。衆目の中の、葵方の多勢にものを言わせた傍若無人な振舞いに完敗した六条御息所の意識がココロヤマシである。ここでは、「かかるやつれをそれと知られぬる」ネタサ（名譽棄損）に六条はより深く傷つき、供まわりをすっかり整えてこなかった事を悔いるので、コ

コロヤマシの重さが表面に強調されない観があるが、長く尾を引き、物の怪になる契機となる。

「かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず…御心地も浮きたるやうに思されてなやましようしたまふ(106)」  
「年ごろはいとかくしもあらざりし(葵上に対する六条の)御いどみ心をはかなかりし所の車争ひに人(六条)の御心の動きにけるをか殿(左大臣方)にはさまでも思しよらざりけり(107-108)」…左大臣方の無神経さ・六条の心理との落差が広がる。

「はかなきこと(車争い)のをりに人の思ひ消ちなきものにもてなすさまなりし御禊の後一ふしに思ひ浮かれにし心しづまりがたうおぼさるるけにや(物の怪となって葵上を苦しめる自分を夢に見る)(110)」

ココロヤマシと意識されると、その意識は固まりこそすれ、おいそれとは消えない。当事者の個性との絡み如何では当事者をして復讐に駆り立てる。そういう質の意識である。

物語は、車争いにより、ココロヤマシを六条御息所に体験させ、以後、彼女を物の怪とし、葵上だけでなく、紫上・女三の宮をも苦しめる役割を演じさせた。

「二三」(紫上のココロヤマシ—出家による救い—)

△事例4▽「まめやかにはいと行く先少なき心地するを今年もかく知らず顔にて過ぐすはいとうしろめたくこそさきさきも聞こゆること(出家を)いかで御許しあらばと(紫上が源氏に)聞こえたまふそれはしもあるまじきことになむ…：…なほ思ふさまことなる心のほどを見はてたまへとのみ(源氏が)聞こえたまふを(紫上は)例のことと心やましくて涙ぐみたまへるけしきを(源氏は)いとあはれと見奉りたまひてよろずに聞こえまぎらはしたまふ(若菜下165-166)」女樂が終り、源氏が紫と語る場面。紫の出家の願いを軽くうけながして済ます源氏を、紫は「例のことと心やましくて涙ぐむ。紫の心の傷が深まり、今や心身共に限界に達しているのを源氏は見抜けない。そのまま紫相手に葵上・六条御息所・明石上と

の関係を回顧し、夕方三の宮方に渡る。源氏に対しココロヤマシと意識したまま残された紫は、自らを「あぢきなくもあるかな」と諦めて「大殿籠」り、暁方発病。紫は源氏に発病を知らせさせない。明石女御からの消息を期に女御には知らせる。女御から報告を受けて源氏は急いで戻り、付ききりで看病するが、出家を願う言葉「聞こゆることをさも心うく」以外に源氏に対する紫の言葉は物語に表れない。女御には口をきく。危篤状態に陥る。源氏は五戒だけを許す。夏、小康を得て「御髪すまし」、源氏に促されて池の蓮を見、源氏の言葉を承けて紫から唱和。当該のココロヤマシは八もうこれ以上は堪えられない。負けた。Vとでも訳すべきか。ココロヤマシと意識しても涙ぐむだけで源氏との心的距離を狭める働きかけはしない。以後の紫の心の孤独を読み取るべきであろう。

紫の出家の志向は、源氏の女三の宮との婚礼直後に芽生えている。「思ひ定むべき世(源氏との夫婦仲)のありさまにもあらざりければ今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる(若菜上50)」という心境から「世のなかもいと常なきものをなどてかさのみは思ひ悩まむ(若菜上52)」と八人間世界の無常の自覚から、男女間の愛憎を越えようとする。彼女の新しい境地。(完訳日本の古典、同上、注二)Vに入る。はじめて出家を源氏に願ったのは、三の宮の六条院入り後五年を経た冷泉院讓位の直後(若菜下132)である。「年月経るままに御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひていささか飽かぬことなく隔ても見えたまはぬ」六条院の女主人として頂点に君臨していたさなかである。新帝の代となるや、朱雀院が新帝に働きかけて三の宮は二品に封ぜられる。「わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねどあまり年つもりなばその御心ばへもつひにおとろへなんさらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがなとたゆみなく思しわた」る紫であった。現実をリアルに見通し、自らを救うすべを見いだしていながら、源氏の許しを得られず、予想どおりの現実に、プライドが高いだけにより深く、苦しみ傷つけられ、源氏によって心身共に限界まで追い込まれたのである。

女三の宮の源氏との結婚は朱雀院による源氏方への復讐であり、底知れぬ破壊力である。

ちなみに、紫に対する他の女性のココロヤマシを重い事例ではないがここであげる。

△事例5▽「人とあひ乗りて簾をだに上げたまはぬを心やましう思ふ人多かり（葵105）」

源氏と紫の葵祭り見物の場面。源氏に心を寄せる女性達は挨拶の歌一つ贈れない。源氏は、こういうやり方で、紫の存在を誰と知らせず公表した。以後、紫の重要さは徐々に固まる。

△事例6▽（正月二日、源氏と紫の上の住む辰巳の町は臨時客に賑わう）「かくののしる馬車の音をも物隔てて聞きたまふ御方々は蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり（初音203）」形容詞終止形に続くゲは見た目の様子と言う。六条院の他の町の方々は、自己の劣性を認識させられて今一つ華やぎに欠けるように見えるというのであろう。

△事例7▽（明石姫君の入内がせまる）「対の上御阿礼に詣でたまふとて例の御方々いざなひきこえたまへどなかなかさしもひきつづきて心やましきを思して誰も誰もとまりたまひて……事そぎたるしもけはひことなり（藤裏葉217）」ココロヤマシキは紫上の供のようになることを指す。この二例、六条院における紫の君臨ぶりの一端を示すものである。

#### 「二4」（空蟬のココロヤマシ）

△事例8▽「まめだちてよろづにのたまへどいとたぐひなき御ありさまのいよいようちとけきこえむことわびしければすくよかに心づきなしとは見えたてまつるともさるかたのいふかひなきにてすぐしてむと思ひてつれなくのみもてなしたり人がらのたをやぎたるに強き心をしひて加へたればなよ竹の心地してさすがに折るべくもあらずまことに心やましくてあながちなる御心ばへを言ふ方なしと思ひて泣くさまなどいとあはれなり（帚木82〜3）」源氏に「折るべくもあらず」と思わせ、源氏を許さないで通す空蟬である。ココロヤマシは「これ以上は堪えられない、気が狂いそうだ」という意識か。以後、源氏の再度の来訪にも空蟬は同じ姿勢を崩さない。

△事例9▽（源氏の文の返事を乞う小君に）「かかる御文見るべき人もなしと聞こえよとのたまへばうち笑み（源氏は）たがふべく

ものたまはざりしをいかがさは申さむといふに心やましく(源氏が小君に)残りなくのたまはせ知らせてけると思ふにっ  
らきこと限りなし(簾木87)「ココロヤマシは」してやられた」敗北感。小君に縋てをうちあけた源氏のしうちをツライ  
とする。以後も空蟬は源氏を近付けない。

〔一五〕(源氏のココロヤマシ)

△事例10 対空蟬▽「やうやう見あらはしたまひてあさましく心やましけれど(空蟬10)」源氏は工面に工面を重ねて中  
川の家を再訪。その夜果たせず、次の夜。空蟬は気配を感じ薄衣を脱ぎすべして隠れる。ココロヤマシは手を尽くしたあ  
げくの敗北感をいう。以後源氏は訪問しない。源氏のプライドはそこまで傷つけられた。再会しないまま空蟬は伊予に下  
る。

△事例11 対藤壺▽「やをら御帳のうちにかかづらひ入りて御衣の褙をひき鳴らしたまふけはひしるくさと匂ひたるに  
あさましうむくつけう思されてやがてひれ伏したまへり見だに向きたまへかしと心やましうつらうてひき寄せたまへる  
に御衣をすべしおきてるざり退きたまふに心にもあらず御髪の取り添へられたりければ……(賢木168、169)」藤壺は子  
を守る母の立場に徹して極力源氏を避けるが、源氏工面の末接近。「宮いとこよなくもて離れきこえたまひてはては御  
胸をいたう悩」み人々騒ぐ。「男は明けはてにけれど出」ず、塗籠に隠れる。暮方になって「昼の御座にるざり出」た藤壺  
をかいま見、再度接近した場面。ココロヤマシは、「ひれ伏し」て源氏と視線を合わせない藤壺の拒絶に、ねばったあげく  
の自己の敗北を突き付けられ絶望し△これ以上は堪えられない▽と苦しみがく気持ちをいう。ココロヤマシと意識した  
若い源氏は「こころ世をもてしづめたまふ御心みな乱れてうつしぎまにもあらずよろづのことを泣く泣く恨みきこえたま  
ふ」と半狂乱の体である。なおも詰め寄る源氏を藤壺は「ながきよのうらみを人に残すともかつは心をあだと知らなむ」  
と突放す。以後、源氏は「御文も聞こえたまはず」、雲林院に籠もる。藤壺は「背きなむこと(出家)を思しとる」。源氏の

藤壺へのこの種の接近はこれが最後となる。

△事例12 対朝顔▽源氏と朝顔との交渉は筈木・賢木に見える。「いと近くて見えむまでは思しよらず(賢木102)」としながら、時節の挨拶程度の文通は齋院となっても女房中將を介して「絶えざるべし(賢木163)」と、永年にわたっており、紫にとっても朝顔は気になる存在であった。式部卿宮死。源氏は女五の宮の見舞いを口実に、父の死に齋院を辞し、五の宮邸に身を寄せる朝顔を訪う。

「心やましくて立ち出でたまひぬるはまして寝ざめがちに思しつづけらる(朝顔74)」

「宣旨対面して御消息は聞こゆ」と人伝の対応に終始し、接近する隙を与えない朝顔に、源氏はココロヤマシと意識させられる。源氏には父を失った今がチャンスという期待感が強かったか。敗北を痛感する。なお諦めきれず再度訪問。

△事例13▽「今宵はいとまめやかに聞こえたまひて一言憎しなども人伝ならでのたまはせんを思ひ絶ゆるふしにもせんとおり立ちて責めきこえたまへど……一声もいとまばゆからむと思してさらに動きなき御心なればあさましようつらしと思ひきこえたまふさすがにはしたなくさし放ちてなどはあらぬ人伝の御返りなどぞ心やましきや(朝顔82)」完敗の源氏の心理を心ヤマシキヤと察する草紙地。

△事例14 対玉鬘▽「おなじ巢にかへりしかひの見えぬかなる人か手ににぎるらんなどかさしもなど心やましようなん(真木柱175)」玉鬘尚侍として参内。髭黒玉鬘を自邸に退出させる。三月、藤山吹の夕映えを見ての源氏の玉鬘宛の文。玉鬘が六条院の養父のもとに帰ることはもはやあり得ない。ココロヤマシは完敗を認めざるをえない源氏の気持ちという。

△事例15 対明石上▽(明後日帰京という夜、明石上源氏の前ではじめて琴を弾く)「忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり入道の宮の御琴の音……げにいと限りなき御琴の音なりこれはあくまで弾き澄まし心にくくねたき音ぞまされるこの



(源氏)御心だにはじめてあはれになつかしうまだ耳馴れたまはぬ手など心やましきほどに弾きさしつづ飽かず思さるるも月ごろなどしひても聞きならさざりつると悔しう思さる(明石93)「明石上の琴の音は、藤壺のそれと比較しても」あくまで弾き澄まし心にくき音ぞまされる」ものであり、琴の手(弹奏法)は琴に通じている源氏でさえも「はじめてあはれになつかしうまだ耳馴れたまはぬ手」である。当該のココロヤマンは、自分より明石上が上だと明石上の腕に甲を脱ぐ源氏の気持をいうのではないか。「心やましきほどに弾きさしつづ」は、うまいなあと思わせるところで手を止めることをいうか。<sup>(1)</sup>

楽器の演奏をココロヤマンという事例に今一つ次例がある。

△事例16▽ (八の宮の述懐)「宮中などにてかやうなる秋の月に御前の御遊びのをりにさぶらひあひたる中に物の上手とおぼしきかぎりとりどりにうち合はせたる拍子などことごとしきよりもよしありとおぼえある女御更衣の御局々のおのがじしはいどましく思ひうはべのなさをかはずかめるに夜深きほどの人の氣しめりぬるに心やましく搔い調べほかにほころび出でたる物の音など聞きどころあるが多かりしかな(権本14)」「定評のある男性達人方の御前演奏よりも女性方の内輪の物の音に軍配を上げる八の宮である。彼は音楽にだけは「いとをかしうすぐれ(橋姫97)」ていた。当該のココロヤマンもへうまい、自分はかなわない▽と圧倒される気持ではないか。<sup>(2)</sup>

「二六」(権中納言―旧頭中将・後内大臣―のココロヤマン)

△事例17 对源氏▽「かの浦々の巻は中宮にさぶらはせたまへと聞こえさせたまひければこれははじめまた残りの巻々ゆかしがらせたまへどいまつぎつぎにと聞こえさせたまふ上にも御心ゆかせたまひて思しめしたるをうれしく見たまつりたまふはかなきことにつけてもかうもてなしきこえたまへば権中納言はなほおほえおさるべきにやと心やましう思さるべかめり(絵合95)」 権中納言(旧頭中将)と源氏との政権掌握上の実質的決定戦というべき絵合である。冷泉帝に

は、権中納言の娘、弘徽殿女御が入内していた（濤標137）。源氏は中宮（藤壺）と計って年上の前斎宮を参らさせた。帝は「御宿直などは等しくしたまへどうちとけたる御童遊び昼など渡らせたまふことはあなた（弘徽殿）がちにおはします。権中納言は、思ふ心ありて聞こえたまひけるにかく参りたまひて御むすめにきしろふさまにてさぶらひたまふをかたがたに安からず思すべし（絵合181）」。冷泉帝は絵が好きで上手だった。「斎宮の女御いとをかしう描かかせたまひければこれに御心移りて渡らせたまひつつ描きかよはせたまふ：ありしよりけに御思ひまされるを権中納言聞きたまひて：我人に劣りなむやと思しはげみてすぐれたる上子どもを召し取りていみじくいましめてまたなきさまなる絵ども二なき紙どもに描き集めさせたまふ（182、183）」。

こうしてことは冷泉帝の御前での絵合に発展する。源氏の須磨の絵日記が他を圧倒して左が勝つ。事例17のココロヤマシは、敗北した権中納言がココロヤマシ—△決定的な敗北に心痛む気持（小学館完訳日本の古典、注二二）▽でおいでるだろう—と推測する草紙地。当の権中納言は「上の御心ざしはもとより思ししみにければなほこまやかにおほししめたるさまを人知れず見たてまつりたまひてぞ頼もしくさりとと思されける（195）」と強気である。

△事例18 对源氏▽権中納言内大臣に昇進。今一人の娘雲居雁を春宮にと思ひ、源氏勢力に押される藤原氏長者家の状況を母大宮に訴えて、「女御をけしうはあらず何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかと思はぬ人におされぬる宿世になん世は思ひの外なるものと思ひはべりぬるこの君（雲居雁）をだにいかで思ふさまに見なしはべらん春宮の御元服ただ今のことになりぬるを人知れず思うたまへ心ざしたるをかういう幸ひ人（明石上）の腹の后がねこそまた追ひすがひぬれ立ち出でたまへらんにましてきしろふ人ありがたくや（少女108）」と嘆き、大宮は「：この家にさる筋の人出でものしたまはでやむやうあらじと故大臣の思ひたまひて女御の御事をもるたちいそぎたまひしものをおはせましかば：（少女108）」と応じる。その直後、彼は雲居雁と夕霧との仲を知る。大宮の手もとから姫君を引き取る事を決意。

「殿（内大臣）は今のほどに内裏に参りはべりて夕つ方（雲居雁を）迎へに参りはべらんとて（三条邸を）出たまひぬいふか

ひなきことをなだらかにいひなしてさてもやあらましと思せどなほいと心やましければ人（夕霧）の御ほどのすこしものものしくなりなんに：（少女123）「このココロヤマシは、入内させても源氏に負けるのは必定と意識しながらも「なお」諦めきれない気持ちと、幼な仲とはいえ雲居雁との関係を女房達に既に知られており夕霧を「なほ」許せないとする気持ちとのダブルパンチであろう。

△事例19 対源氏▽「なほ姫君の御事飽かず口惜しかやうに（源氏が玉鬘を庇護するように）心にくくもてなしていかにしなさむなどやすからずいぶかしがらせましもをとねたければ（夕霧の）位さばかりと見ざらむかぎりはゆるしがたく思すなりけり大臣（源氏）などもねむころに口入れかへさひたまはむにこそは負くるやうにてもなびかめと思すに男方はさらにいられきこえたまはず心やましくなむ（常夏47）」雲居雁を引き離されても源氏も夕霧も頭一つ下げない。ココロヤマシは源氏方に手も足も出ない内大臣の完敗の気持ち。

△事例20 対夕霧▽（内大臣の藤の花の宴に夕霧を招待）「わが御方にて心づかひいみじう化粧じてたそかれも過ぎ心やましきほどに参でたまへり（藤裏葉209）」ココロヤマシは、十分待たされてすっぱ抜かされるのではないかと不安な気持ち。類例△事例21▽（匂宮夕霧六の君と結婚）「右大殿には六条院の東の殿磨きしつらひて限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければいとしも御心に入らぬことにていかならんと安からず思ほして案内したまへばこの夕つ方内裏より出でたまひて二条院になむおはしますなると人申す思す人持たまへればと心やましけれど今宵過ぎんも人笑へなるべければ御子の頭中将して聞こえたまへり（宿木55）」

「二七」（紅梅大納言のココロヤマシ―藤原氏長者家の先細り―）

紅梅大納言は内大臣（旧頭中将）の次男。柏木が死に、物語中三代目の藤原氏長者である。娘が二人いる。春宮には既に右大臣（夕霧）の大姫君が入り信望を固めている（匂宮12）が、大納言は大君を「春日の神の御ことわりもわが世にやもし

出で来て故大臣(父内大臣)の院の女御(弘徽殿)の御事を胸いたく思してやみにし慰めのこともあらなむと心のうちに祈りて(紅梅31)「春宮に参らせた。中君を匂宮にと志し、紅梅の枝と歌を殿上童の若君に託す。匂宮の心寄せは宮の姫君(真木柱腹の故式部卿の姫君)であった。翌日、大納言の気持ちを受け付けようともしない匂宮の返事を見て、再度働きかける。

△事例22▽「今日も(若君を匂宮に)参らせたまふに本つ香のにはへる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむとすきずきしやあなかしことまめやかに聞こえたまへりまことに言ひなさむと思ふところあるにやとさすがに御心ときめきしたまひて花の香をにははす宿にとめゆかば色にめずとや人のとがめんなどなほ心とけずいらへたまへるを心やましと思ひるたまへり(紅梅40)」ココロヤマシは、藤原氏長者である自分の婿となる意志が匂宮に微塵もないことがはっきりした紅梅大納言の敗北感をいう。その重みを何処まで読み取るべきであろうか。

年下の夕霧が、右大臣で、衛門督・権中納言・右大弁…と子息に恵まれ、中姫君は今上の二の宮に嫁ぎ、六の君は匂か薫にと一条宮の養女にして格付け中である(匂宮)。対するに紅梅大納言は後を継ぐべき男子は真木柱腹の若君のみである。匂宮がこの若君を身近に侍らせ宮の姫君への文の使者とするあたり、空蟬の小君のイメツジと重なるものがある。

大体、物語は、内大臣の子息を紹介するのに、柏木をさしおいて、紅梅を美声で笙の笛もこなす「四の君腹の二郎」として「八つ九つばかり(賢木193)」から登場させ、冷泉帝即位にもなつては「四の君腹の姫君(弘徽殿女御)」について登場させて「かうぶりせさせ(濡標106)」、弁少将時代も梅枝・初音・藤裏葉で美声を賞されている。物語のPlot上、二郎の紅梅が将来内大臣の後継者となるべきこれらの布石と照合するのは紅梅の巻ではないか。紅梅の巻は、梅の花の美しさ・宮の君の清らかさ・北の方としての真木柱の柔らかさと包容力の豊かさに包まれながら、藤原氏長者家の先細りをそれとなくさらりと描いた、その意味で重要な一巻である。

ココロヤマシにもどる。紅梅大納言の敗北感を氏長者としての責任をかぶせて捉えれば、このココロヤマシは重くかつ

寂寥やるかたないものであろう。

紅梅大納言の代に至るまでに、ここまでの先細りを導いた要因に、后がねとなりそうな女性の源氏によるかなり徹底した掌握がある。秋好を冷泉の中宮に立て紅梅の姉弘徽殿女御を抑えたのもさることながら、都の姫君方と異なり、子宝に恵まれた、その意味で生命力の強い玉鬘を掌握し、実父内大臣の政権拡大の手を封じたことが大きい。夕顔に対する若い源氏の執着のアヤシサ(夕顔の巻)を、政権掌握をめざす源氏の潜在意識―政敵の行方不明の女兒を追う無意識の意識―と見れないだろうか。欲望を充たされない(夕顔119)六条御息所との苦しい関係の継続維持にしても、源氏の真の関心は御息所自身以上に前春宮の姫君の掌握にあったのではなかったか。源氏物語をそうそう政治的に読もうとするのではないが、紅梅の巻を理解するうえで、こういう側面を無視できないと思うのである。

ちなみに竹河の巻は、髭黒亡き後、玉鬘が永年尚侍の実力で、大君を冷泉院に参らせて女宮と冷泉待望の男宮を儲けさせ、中君を今上の尚侍とする顛末を別伝として物語る。薫が藤原を名乗れないのとともに藤原氏長者家にとっての皮肉である。この冷泉院の後日談から、以下物語は、その春宮時代の対抗者八の宮を登場させ、源氏繁栄の犠牲者とその姫君方の生きざまを、紫にかなえられなかった△出家による救い▽をからめて展開する。

△事例23 対今上▽(藤の花の宴が女二の宮の藤壺で公事として催された。薫は「御婿にてもてはやされ」た。)[按察大納言(紅梅)は我こそかかる目を見んと思ひしかねたのわざやと思ひるたまへりこの宮の御母女御をぞ昔心かけきこえたまへりけるを参りたまひて後もなほ思ひ離れぬさまに聞こえ通ひたまひてはは宮を得たてまつらむの心つきたりければ御後見のぞむ気色も漏らし申しけれど聞こしめしだに伝へずなりにければいと心やましと思ひて……なぞ時の帝のごとしきまで婿かしづきたまふべきまたあらじかし……などいみじくそしりつぶやき申したまひけれどさすがにゆかしかりければ参りて心のうちにぞ腹立ちるたまへりける(宿木18)「藤壺女御も女二の宮も与えられなかった大納言が、薫に降

嫁した女二の宮の為の公宴へ出席を要請された。一重二重の屈辱に痛む気持ちでココロヤマシである。憤懣は、帝をそしってもおさまらない。このココロヤマシは藤原氏長者の決定的敗北を認めなければならない、気の狂いそうな心情である。奉られた歌の中に「世のつねのいろとも見えず雲居までたちのぼりたる藤波の花」があった。△事例22▽の二年後である。

### 三 その他の諸事例

#### 「三」(若い源氏のココロヤマシ)

△事例24 対末摘花・頭中将▽「その後こなたかなた(源氏・頭中将)より文などやりたまふべしいづれも返り事見えずおぼつかなく心やましきに：中将はまいて心いられしけり(末摘花19)」源氏にも頭中将にも末摘花から返事がない。ココロヤマシはその敗北感をいう(一人ともか)。特に中将は苛々した。これは第三者からすれば滑稽そのものである。なお、心イラレは心ヤマシに併存する心理状況で、心ヤマシそのものではない。

△事例25 対末摘花・頭中将▽「常陸の宮にはしばしば聞こえたまへどなほおぼつかなうのみあれば世づかず心やましう負けてはやまじの御心さへ添ひて命婦を責めたまふ(末摘花21)」心ヤマシは末摘花の無反応を、中将を受け入れ自分を拒絶したと思ひ込む源氏の意識。それは「負けてはやまじ」と対抗心を駆り立てるものである。

△事例26 対頭中将▽「中将宿直所よりこれまづとぢつけさせたまへとおし包みておこせたるをいかで取りつらむと心やまし(紅葉賀74)」老女房源典侍の許で源氏と中将が鉢合わせし、太刀を抜く茶番劇を演じ合う。中将の帯が源氏の手許に残され、源氏の端袖が中将に奪われた。取られた端袖を中将から送り返される。五分五分の引き分けを源氏はココロヤマシと意識する。

右の三つのココロヤマシは、源氏にすれば、してやられた一生頭が上がらないと深刻なのであるが、若い貴公子を戯画化する中で使用された事例である。

〔三二〕(頭中将のココロヤマシ)

△事例27 対源氏▽「(雨夜の品定め) わがいもうとの姫君はこの定めにかなひたまへりと思へば君のうちねぶりに言葉まぜたまはぬをさうざうしく心やましと思ふ(簞木56)」 中将は左馬頭・藤式部の前で源氏に妹葵上を讃めてもらいたい。兄としての面目も立ててほしい。その絶好のチャンスをと、居眠りをしてやり過ぎす源氏に、中将はもの足りず、自分の負けだと思う。物語は、妻葵上を源氏が讃める機会のないまま葵の死に至る。

〔三三〕(中の品の人々のココロヤマシ夫婦仲)

△事例28▽(左馬頭が指喰女に)「われたけく言ひそしはべるに：(女) 人数なる世もやと待つ方はいとのどかに思ひなされて心やましくもあらず：(男) 浮気に耐えられないから) かたみに背きぬべききざみになむあるとねたげに言ふに(簞木59〜60)」 離別の意識(背きぬべききざみ)が底にあってココロヤマシ△これ以上は耐えられない▽が口をついて出たか。

△事例29▽(承前、雲の夜更け女の家へ行く。「待ちけるさま」。女は不在。)  
「さがなくゆるしなかりしも我を疎みねと思ふ方の心やありけむと：心やましきままに思ひはべりしに(簞木61)」 してやられた、これまでだという意識。

△事例30▽「いと久しくまからざりしものたよりに立ち寄りてはべれば：心やましき物越にてなむ逢ひてはべる：よきふしなりとも思ひたまふるに(簞木70〜71)」 「よきふし」縁を切る絶好のチャンスという意識がある。事例28の同類。

〔三四〕(雲居雁のココロヤマシ対夕霧)

△事例31▽(夕霧一条宮訪、夜更けて帰宅)「かかる夜の月に心やすく夢みる人はあるものかすこし出でたまへあな心憂な

ど聞こえたまへど(雲居雁は)心やましようち思ひて聞き忍びたまふ(横笛67)」このココロヤマシは、自分より身分の高い宮を相手に夕霧が本気なのだ、負けたという意識であろうが、そう「うち思」(ちらりと思)う雲居雁である。

△事例32▽「夕霧」この昼つ方三条殿におはしにける…北の方はかかる御歩きのけしきはの聞きて心やましと聞きゐたまへるに知らぬやうにて君達もてあそび紛らはしつつわが昼の御座に臥したまへり(夕霧12)」一旦ココロヤマシと意識すれば、彼女なりの深刻さでその意識は消えない。

△事例33▽「日たけて殿には渡りたまへり…女君は帳の内に臥したまへり入りたまへれど目も見あはせたまはず…(雲居雁)…まろは早う死にき…(夕霧)…え疎みはつまじと何心もなくいひなしたまふも心やましようて(夕霧158)」ココロヤマシは夕霧の対応に△これ以上は耐えられない▽であるが、雲居雁のばあい、することも言うことも夕霧に対する甘えであり、本人が真剣であればあるほどカリカチュア性が強められる。

上述「三1」～「三4」のカリカチュアとして用いられる諸事例の存在は、ココロヤマシが、「三」で述べたごとく、深く重い心の痛みをいう語であることを逆に裏付けるものであろう。なお、「三7」も紅梅大納言の戯画化であって、「三」と「三」との間に必ずしも一線を画せるものではない。

「三5」(夕霧・同乳母のココロヤマシ)

△事例34▽(雲居雁に奪われた一条御息所の文を探しあぐねて、夕霧)「隠したまへらむほどもなければいと心やましくて明けぬれどとみにも起きたまはず(夕霧124)」奪われた文は「宵過ぐるほど」に届けられた「御返り」。夕霧は「御息所の御文」と推測。即座に対応しなければ手遅れになる。文を隠せる場所は狭い範囲に限られている。それなのに取り戻せない。雲居雁に完全にしてやられて、その夜が明けた。

△事例35▽「いでやものげなしと(内大臣が若い夕霧を)あなづりきこえさせたまふにはべるめりかしさりとわが君や



人に劣りきこえさせたまふと（誰にでも）聞こしめしあはせよとなま心やましきままに言ふ（少女124）」大宮、雲居雁と惜別。その場で夕霧乳母が夕霧をかばって大宮に抗議する。「ものげなし」は夕霧の官位が六位であることを指す。

△事例36▽（内大臣に雲居雁を引き離される）「浅葱の心やましければ内裏へ参ることもせずものうがりたまふを（少女129）」浅葱は六位の袍。事例35に引き続き、大宮のはからいで夕霧雲居雁と逢う。「雲居雁乳母」めでたくとももののはじめの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞こゆただこの屏風の背後に尋ね来て嘆くなりけり男君我をば位なしとてはしたむるなりけりと思す…（125）」以後、夕霧にとって浅葱が敗北のシンボルとなった。

「三六」（源氏を取り巻く他の女性方―明石上・玉鬘・（女三宮）のココロヤマシ）

△事例37▽「御車をはるかに見やればなかなか心やましくて恋しき御影をもえ見たてまつらず（濤標123）」明石上住吉に詣で、源氏の一行と出会い、身の程の差を痛感。

△事例38▽「野分の後、源氏方々を見舞う。明石の部屋の）端の方に突いるたまひて風の騒ぎばかりをとぶらひたまひつれなく立ち降りたまふ心やましげなりおほかたの萩の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地してとひとりごちけり（野分78）」元旦には源氏は明石方に泊まった（初音21）のに。明石上の様子から心中を察する草紙地。

△事例39▽「この御ことによりてぞ近くるざり寄りていかなる風の吹き添ひてかくは響き侍るぞとよとうち傾きたまへるさま灯影にいとつくしげなり笑ひたまひて耳固からぬ人のためには身にしむ風も吹き添ふかしておしやりたまふいと心やまし（常夏42）」

△事例40▽（柏木の小侍従相手の言葉）「その（女三宮）御ありさまよ思へばいとたぐひなくめでたけれど内々は心やましきことも多かるらむ院（朱雀院）のあまたの御中にまた並びなきやうにならばしきこえたまひしにさしも等しからぬ際の御方々にたちまじりめざましげなることもありぬべくこそ（若菜下176）」「等しからぬ際のキハは身分については上下両

極端な場合にのみいう。血統を絶対視する柏木からすれば、女三宮は入敗北感にこれ以上耐えられないVことが多いはずだとなる。但し彼女のココロヤマシは見当らない。

「三七」(式部卿宮のココロヤマシ—対髭黒)

△事例41▽(玉鬘若菜を進上、源氏四十の賀宴を催す)「式部卿宮は参りにくく思しけれど御消息ありけるに心あるやうならむも便なくて日たけてぞ渡りたまへる大将のしたり顔にてかかる御仲らひにうけばりてもものしたまふもげに心やましげなるわざなめれど(若菜上44)」式部卿宮からすれば、髭黒は娘婿であったが、源氏の養女玉鬘を迎えて娘を離縁し、宮との縁も捨てた男である。ココロヤマシゲは自己の敗北を改めて認識させられている様子。

「三八」(薫の相手の女性たちのココロヤマシ)

△事例42▽「おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを人のためにことごとしくななどはもてなさずいとよく紛らはしそこはかとなく情ふかからぬほどのなかなか心やましきを思ひよれる人はいざなはれつつ三条宮に参り集まるはあまたありつれなきを見るも苦しげなるわざなめれど絶えなんよりはと心細きに思ひわびさもあるまじき際の人々のはかなき契りに頼みをかけたる多かりさすがにいとつかしう見どころある人の御ありさまなれば見る人みな心にはからるやうにて見過ぐさる(匂宮22)」薫の女性への対し方は、本気で対することがなく、関係を深めようとしなない。女性側からすれば「なかなか心やましき」—なまじっか関係を持たなければ良かった、敗北感が確実になるだけで、これ以上は耐えられない—と意識させられる、そういう質のものだという。三条宮に召されても先の展開はない。経済上先の保証がなくて頼っては居るものの、薫と関係した女性は皆、薫に騙されているような状況でそのまま自然月日が経過する。薫は関係した女性の生活の保証はするが、精神的に女性を豊かに成熟させ幸せにすることはできない。

△事例43▽「…按察の君とて人よりはすこし思ひましたまへるが局におはしてその夜は明かしたまひつ…うちわたし世

にゆるしなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれいとほしければ深からずうへは見ゆれど関川のしたのかよひはたゆるものかは深しとのたまはんにてだに頼もしげなきをこの上の浅さはいとど心やましくおぼゆらむかし(宿木69)「事例42の具体例。「いとほし」と感じながら「深からず」と詠み出す薫である。

「三九」(匂宮のココロヤマシ―対薫)

△事例44▽「宮(匂)はいとどかぎりなくあはれと(中の君を)思したるにかの人(薫)の御移り香のいと深くしみたまへるが：しるき匂ひなるを：あやしと咎め出でたまひて：御心騒ぎけりさるは(女君は)単衣の御衣なども脱ぎかへたまひてけれどあやしく心より外にぞ身にしみにける：(匂宮歌)女はあさましくのたまひつづくるに言ふべきかたもなきを：(歌)とてうち泣きたまへる気色の限りなくあはれなるを見るにもかかればぞかしといとど心やましくて我もほろほろとこぼしたまふぞ色めかしき御心なるや(宿木83)「薫の移り香により薫が中の君に近付いたことが明らかに、匂宮も傷つく。女君の泣く様に一入心惹かれて、いよいよ猜疑心が昂ぶり、心ヤマシ―薫にしてやられた―と思うや、涙のあふれる宮である。匂宮をココロヤマシの敗北感に陥れたのは薫の体臭である。薫は生まれながらに△忍ぶ恋▽ができない。本人がそれを自覚しているか否か。女君の懐妊を薫は腰の帯を見て確認したが、ココロヤマシには至らない。こうして、中の君だけでなく、匂宮も愛を傷つけられる。薫の体臭の破壊力である。

「三10」(薫のココロヤマシ)

△事例45 対匂宮▽「中納言の君はかく宮の(二条院に)こもりおはするを聞くにも心やましくおぼゆれどわりなしやこれわが心のをこがましくあしきぞかしうしろやすくと思ひそめてしあたりのことをかくはおもふべしやと強ひて思ひ返して：(宿木85)「事例44に続く部分。中君へ近付く隙を与えない匂宮に薫はココロヤマシと意識する。敗北を自認するや初心に返り、マメ人ぶりを発揮し衣料を送って自己満足する。匂宮と女君との心の痛手には思い至らない。薫のココ

ロヤマシの深刻さは匂宮とはかなりの距離がある。

△事例46 対匂宮・大君▽「例の明けゆくけはひに鐘の声など聞こゆいぎたなくて出でたまふべき気色もなきよと心やましく声づくりたまふもげにあやしきわざなり(総角210)」大君の意向を逆手にとって、匂宮を中君に接近させる。大君には許されない。匂宮との張り合いに完敗の夜明けである。以後も大君は薫に従わないまま死ぬ。

△事例47▽(中君から浮舟の存在を知らされて薫)「いでやその本尊願ひ満てたまふべくこそ尊からめ時々心やましくはなかなか山水も濁りぬべくとのたまへば：(東屋163)」薫にとってココロヤマシは「時々」存在し得る意識である。薫の意識構造の特異性の一端と見るべきか。宗教心をまとう彼の人間性に不気味なものが感じられてならない。

以上、源氏物語におけるココロヤマシの諸事例を検討し、この語の重みを確かめた。

〔注〕

(1) 諸注は、△「心や(病)まし」は続けて聞きたいのに、弾きやめるので、もどかしくいららする気持ちなのである。(小学館日本古典文学全集、注二三)▽△続けて聞きたいのに途中でやめるのもどかしい感じ(小学館完訳日本の古典、注二一)▽△(心やましに注番号を付し)もっと聞きたいと心残りを感ぜさせる程度に途中まで弾き止め弾き止めして、残念に思いになるにつけても(新潮日本古典集成、注一七)▽とする。

(2) 諸注は、△「心やましく」の評は(帝に召されない女性の)そのような思いの結果をいつているのだ。みたされないいらだたしい思いが、琴の音に託される時、それが「心やましくかい調べ」である。(玉上琢彌『源氏物語評釈』第十卷199頁)▽△悩み深い風情にかき鳴らして。閨怨を訴える趣。(新潮日本古典集成、注一五)▽△苦悩のある感じに。おのずと己が孤心の現れ出るような独奏。(小学館完訳日本の古典、注二八)▽とする。